時間を表す接尾語について
――「寸前」を中心に――

福　沢　将　樹

第１節　時間を表す「接尾語」

本稿で問題にしたい「接尾語」とは、次のようなものである。

(1)　a．出発後　到着前　走行中　……

b．スタート直後　ゴール直前（寸前、目前、目の前……）　走行途中……

c．出発１分後　到着１分前　……

d．降り始め　やりかけ　……

e．散らかしっぱなし　忘れがち　……

これらは、サ変動詞語幹に直接接続したり、又は連用形に接続したりするが、通例「助詞」「助動詞」とは認識されていないものである。「出発後」全体で１つの「単語」のようにも見えるが、比較的生産性高く、様々な動詞的な語彙の後に下接する。これらの他に、「帰り際」「走りながら」「出発してのち」などの表現も気になるし、「時間を表す」という意味的側面に拘らなければ「やりすぎ・やりすぎる」「食べ放題」「食べにくい」など気になる形式は他にも様々なものがあるが、性質は多岐に亘り、一纏めにするわけにいかない。

さて表題に「接尾語」とした。英訳では「clitics」としておいた。或る種の非自立的（附属的）な形態素[1)]は、一方で独立した単語としての用法を同時に併せ持つものもあれば、現代では専ら附属的な用法しか持ち合わせないものもある。そしてそれが「語」ないし「単語」と呼ぶべきものか、それともそうで

1）「形態素」というと、一般には「最小の単位」を指す。従って「二字熟語」や「複合辞」などは「形態素」ではないことになる。しかし斎藤（2004）のように、{春風} という単位でも「形態素」と扱った方が便利である。松下文法では「単辞」であろうと「連辞」であろうと「原辞」と呼ぶことに相当する。

はなく「接辞」と呼ぶべきものかということは、簡単に断じることができない。いわゆる「助動詞」でさえ単語説と接辞説とに分かれている現状である。よって本稿の表題は便宜的なものである。

本稿では、⑴に挙げたような様々な語彙のうち、「寸前」を主に取り上げる。その理由は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（以下「BCCWJ」）で単純文字列検索（検索システム「少納言」による）をした場合、比較的「ゴミ」が少なく、総ヒット数の点でも扱いやすい分量だからである。ではなぜ品詞指定のできる「中納言」でなく文字列検索しかできない「少納言」を用いるかというと、本稿で取り上げるような形式にどのような「品詞」指定がされているのか、筆者にとって想定外の事例が存在することを恐れたからである[2)]。

第２節　「寸前」の一般的記述

2・1　検索条件と結果

BCCWJ を「少納言」によって、「寸前」という単純文字列検索を行った。条件は以下の通りである。

・ジャンルは「書籍」「雑誌」「新聞」

・期間は2001～2005年の 5 年間分

これによって385件のヒット数を得た。中に「ゴミ」として以下の 2 例のようなものも含まれている。これを除くと383件ということになる。

⑵　「二〇時一寸前」「二二時一寸前」

上記期間内であれば「全ジャンル」にしても451件であり、データの取得可能な範囲に収まる（500件を越えるとそれ以上表示がされない）わけであるが、上記 3 ジャンルに限った。その理由は、一般読者に公開され比較的閲覧容易なジャンルであり、言わば“特殊な”文体のものが比較的少数であることが期待されるからである。そして期間を上記の 5 年間にした理由は、この 3 ジャンルで共通に収録されている時期だからである。そのため、以上のような条件とした。

2）尤も「中納言」でも文字列検索をすることができる。

その結果取得できた用例数は、書籍326件（ほかゴミ２件）、雑誌44件、新聞13件である。

2・2　上接語

「寸前」の上接語は、サ変動詞語幹か、活用語の連体形、「サ変動詞語幹＋の」「体言＋の」、そして上接語ナシのもの、でほぼ尽きている。但し形容詞・形容動詞の例は見当たらない。活用語の連体形はほとんどが非過去形だが、稀に「～た」形も見られる（⑶ b の例示参照）。

⑶　a．崩壊寸前　絶滅寸前　破綻寸前　射精寸前　パンク寸前　お蔵入り寸前　など（サ変動詞語幹）

b．爆発する寸前　当たる寸前　喧嘩になる寸前　渡米するという寸前　見えなくなる寸前　包まれる寸前　辿り着こうとした寸前　など（活用語の連体形）

c．落城の寸前　崩落の寸前　など（サ変動詞語幹＋の）

d．その寸前　胸の寸前　亡国の寸前　絶頂の寸前　など（名詞＋の[3]）

e．床に落下しそうになったカップを寸前のところで受け止めた。　など（上接語ナシ）

c はサ変動詞かもしれないし、実は「名詞」なのかもしれない。しかし d になるともはや「サ変動詞語幹」とは言えず、その意味で動詞ないし動詞的な a ～ c とは異質である。しかし例えば「絶頂に至る寸前」「胸に接触する寸前」などの表現が短縮されたようにも感じられる。c か d か判断に迷うものも存在する。

そして、例外的に普通サ変としては用いられない、「名詞」相当の語形に直接接続する例も、ないことはない。上よりやや多めに挙げる。

⑷　売り切れ寸前　取り壊し寸前　レース寸前　レース中止寸前　ゴール前寸前　ホーム寸前　ポンコツ寸前　廃車寸前　発禁寸前　くも膜下出血寸前　傷害事件寸前　積み木くずし寸前　など

「売り切れする／した」「取り壊しする／した」と、言えないこともないかもし

3）連体詞「その」も便宜上含めた。

れないが、やや落ち着かないと思う。⑶ a か判断に迷うものである。しかし「ホーム」や「積み木くずし」になるともはや常識的にはサ変動詞ではない[4]。これらもまた「ホームインする寸前」「『積み木くずし』のような家庭環境になる寸前」などの短縮表現のようにも感じられる。

その他、「皮一枚寸前」「寸前の寸前」という表現も見られた。

2・3　後接語・活用

「寸前」の活用は、以下のようである。学校文法でいう 6 活用形に拘らず用法に従い細分して掲げる。

⑸　a．終止形　　寸前だ。
　　b．語幹終止形　寸前。
　　c．連体形 1[5]　寸前の
　　d．連体形 2　　寸前な（のだ）
　　e．語幹中止形　寸前、
　　f．連用形　　寸前で（ある）
　　g．デ中止形　　寸前で
　　h．助詞　　寸前で　寸前に　寸前を　寸前まで　寸前にまで　など
　　i．仮定形　　寸前なら
　　j．その他　　寸前ギリギリの　（気絶）寸前状態　（絶滅）寸前種

g は「だ」の中止形としての「で」であり、以下のような用例がある。場所格のデや連用形のデ（アル）とは区別できるだろう。

⑹　「[…]［その事件は――引用者補］迷宮入り寸前で、担当の刑事はロートルで窓際族のおっさんらしいけどな」（前田良輔（執筆）／青木研次（ほか著）『私立探偵濱マイク：シナリオ　上』）

なお i の「寸前なら」は、検索上実例は得られなかったが、可能な形式では

4）尤も、いかにも「名詞」であってもサ変動詞化する、「主婦してます」のような表現も現代には存在する。
5）連体格助詞「の」であるとも言えるが、区別せずに掲げる。

あろう。以下のような例をネット上から拾うことができる。

⑺　離婚寸前なら、連帯責任も消滅

（『マンガでわかる！　法律の抜け穴 ⑶ 男と女のバトル編』小早川浩、山川直人（著）。https://books.google.co.jp/books（2016年11月19日閲覧）「第10話の急所」該当ページ数不明。傍線部引用者。以下同様）

さてこれらの活用のありようは、おおむね「ダ」（奥津 1993［1978］[6]）や「第三形容詞」（村木 2012）に近いものである。「第三形容詞」とは、村木新次郎の提唱した概念で、村木（2012）は「底なし–」「互角–」「抜群–」「真紅–」などの一連の語彙について、次のような特徴を挙げている。

⑻　a．「–が」「–を」の形式で用いられた例がない。もしくは稀である。

b．「–の」の形式で、後続の名詞を修飾限定する連体用法が多い。

c．「–だ」「–だった」「–です」「–でした」といった形式で、述語としての用法がみられる。

d．「–に」（稀に「–で」）の形式で後続の動詞・形容詞を修飾する用法がみられる。

e．連体修飾をうけない（村木 2012、190頁ほか、および37頁より）

しかし「寸前」は、これらの純然たる「第三形容詞」とは異なる特徴がある。第一に、明らかに「名詞」としての用法も存在し、次の a・b のように「を」「に」などの格助詞を下接することもある。第二に、次の a ～ c のように「～の」の連体修飾を受けることもあり、これも「名詞」の用法である。第三に、「第三形容詞」は通例「寸前、」のような語幹中止用法を持たないが、次の c のような例がある。そのため、「寸前」は「名詞」と言ってもよいのではないかと言われるかもしれない。

⑼　a．ならばと給費生をねらって司法省法律学校を受験すると、合格はしたが肝心の給費生の選考に外されて再びの挫折一の寸前を、介する人があって学費援助を条件に養嗣子となり、今は東京帝国大学法学部学生の「若槻禮次郎」となっていた。（藤富康子（著）『サクラ読

6）奥津（1993）［1978］は、主にいわゆる「ウナギ文」について論じたものだが、ウナギ文以外の「だ」一般の活用について論じたものでもある。

本の父井上赳』。連体修飾句「～の」上接および格助詞「を」下接例）

b．胸の寸前に迫った弾丸を見つめ、安県を見る。（うえお久光（著）『悪魔のミカタ　8』。連体修飾句「～の」上接および格助詞「に」下接例）

c．繰り返しを通し、生物多様性はなだらかな上向きの曲線を見せて増えてゆき、人類出現の寸前、ついにピークに達したのだ。（エドワード・O. ウィルソン（著）／大貫昌子，牧野俊一（訳）『生命の多様性 下』。連体修飾句「～の」上接および「、」による中止の例）

aの「を」は対格というより状況を表すものであり、やや落ち着かないが、bの「に」は述語「迫る」に対する場所格関係を表すものである。またいずれも「～の」によって連体修飾を受けており、また⑶bのように活用語の連体修飾を受けるものもある。

では「寸前」や「○○寸前」という複合形は、「名詞」と言ってよいのであろうか。

しかし、純然たる「名詞」とも異なる特徴がある。第一に、確かに助詞を下接する用法があるとはいえ、「が」「は」を直接下接して「主語」として働いた例が見られない。非文とも言えないかもしれないが割合として少数に留まることは間違いない。第二に、上接語の動詞と一体化して格関係を受ける、いわゆる「句の包摂」現象もまた見受けられるのである。

⑽　a．「[…] ハンター女王と結婚寸前の状態だってこと、皆が存じてますわ。[…]」（ヴァイオレット・ウィンズピア（著）／安引まゆみ（訳）『恋のクルーズ』）

b．娼婦とベッドイン寸前に女房から携帯かかってくるシーンがあるけど。（町山智浩，柳下毅一郎（著）『ファビュラス・バーカー・ボーイズの映画欠席裁判』）

c．この関係が破壊され、いまにも崩壊寸前なのは、彼らの行うコミュニケーションが正常な個体間コミュニケーションとは別物となっていることを意味している。（金原克範（著）『〈子〉のつく名前の女の子は頭がいい：情報社会の家族』）

aは「ハンター女王と〇〇寸前だ」という係り受け関係ではなく、どう見ても「ハンター女王と結婚する」という係り受け関係である。bも同様である。cも「いまにも崩壊する」という係り受け関係である。従ってこれらは次のような構文と解される。

⑾　［ハンター女王と結婚］寸前だ

⑾のような「句の包摂」構文は、意味的には［ハンター女王と結婚する］という、格成分と述語（動詞）との格関係なのだが、形態的には「結婚寸前」という複合語を形成している。意味と形態が「ミスマッチ」しているように見えるわけである。

このとき「結婚寸前」という「複合語」は、形態的には「名詞」に似ているが、統語的には「動詞」に似ている。もし名詞だとしたら、基本的に「〜と」のような格成分を必須成分として取ることはない[7]からである。

従って、「寸前」「〇〇寸前」には、「名詞」としてよいものと、単に「名詞」とするわけにはいかないものとの2種類があるとしなければならない。以下、節を改めてまず形式語としての側面を考察し、次いで品詞性について再考することとする。

第３節　形式語ないし接尾辞としての「寸前」

句の包摂を起こす合成語については、これまでも盛んに論じられてきた。影山（1993）は以下のような例を挙げている。そして「接続詞的なもの」⒀aと「名詞的なもの」⒀bに分かれるという。

⑿　a．ひかり号が静岡駅を通過後に …

　　b．警察が交通違反を取り締まり中に …（影山 1993、32頁。傍線引用者）

7）但し新屋（2014）は、格成分を取ることも「名詞」の機能の一つとして見ているようである。例えば「太郎と友達だ」「長男は海外に駐在で、次男は来年大学を卒業で［…］」のようなものが挙げられている。このことは重要な指摘であり、「名詞」に対する固定観念を打ち破るものである。しかし後述するように、これらが本当に「名詞」なのかどうか、再検討が必要と考える。

⑿　a．［後ろを振り向き］ざまに
　　［友人を訪ね］がてら
　　［学校から帰りしな］に
　　［羽田を離陸］後
　　［仕事が片付き］次第
　　b．［仕事にかかり］っきり
　　［燗をし］たての酒
　　［マンションを契約］済みの人
　　［お金を借り］っぱなし
　　［授業を休み］がち（以上影山 1993、329～330頁。傍線影山）

こうした「句の包摂」の外に附属している「寸前」のような要素を「接尾辞」とするか「語」とするかは、見解が分かれている。杉山（1943）は「助詞」としたが、これは服部（1960）の「附属語」に相当するだろう。同様に「語」や「形式体言」とするものに時枝（1950［1978: 130］）、森岡（1994: 313）などがあるが、そうではなく「体言化接尾辞」とするものに宮岡（2015: 219）がある。但し諸氏の扱う語例はそれぞれ大きく異なる。「云ひたげ」（時枝）「故障がち」（森岡 458頁）を「語」「形式体言」とする一方、「休みがち」「喋りっぱなし」「焼きたて」（宮岡）「飛び退きざま」（森岡 246頁）を「接尾辞」とする。また漢語サ変動詞語幹に下接した合成語を扱うものがなぜか少ない。森岡の「故障がち」は珍しい例で、その森岡にしても漢語に下接した例を挙げるのは奇妙なくらい稀である。

本稿で扱うものは、林（1987）の「臨時一語」という概念の一部によく似ている。「臨時一語」とは、「その時その時の必要によって生まれ、すぐに消えて行く単語」（林 1987：233）であるとされるが、⒁のように本稿のものと瓜二つの類型も挙げられており、⒂のように文節境界や音声上のポーズを内部に含むものもある（以下林の挙げた例文を孫引きする）。

⒁　a．高速道路の走行中にクランクシャフトが折れた。（四・二七朝日）
　　b．一昨年の川治プリンスホテル火災以後、都内のホテル、旅館など……［…］（二・二四読売）

c．［…］商業化一歩手前の実証炉の共同設計［…］（五・一一朝日）

d．［…］戒厳令施行当時にくらべ、［…］（二・二四読売）

⑸　a．社会党が五十七年度予算案の組み替え要求案をまとめたほか……（二・二四読売）

b．遠い異国で、さびしい晩年を送っている日本国籍の老人対策については、［…］（三・二六朝日）

「走行中」「老人対策」といった形態論上のまとまりを度外視して、下線部全体を「一語」とするような発想である。このときしばしば「句の包摂」現象が起こっている。

前節⑾のような「句の包摂」現象を理解するためには、サ変動詞語幹に直接下接する「寸前」とはいかなる語構成要素なのかを明らかにしなければならない。

まず「附属語」（服部 1960）と見なす説について見ておく。「附属語」と見なすということは、或る種の「助詞」と見なすということである。古く杉山（1943）は次のような議論を展開している。

⑹　その　赤い　お盆ごと　持って　来て　下さい。

に於て「お盆ごと」は一文節である。これを「語」とみとめるとすればいはゆる副詞にあたるものとすべきである。「お盆ごと」の他の「文節」への続き方は副詞と同資格だからである。それでは「お盆ごと」は全然副詞と同じであるかといふと、「お盆ごと」は「赤い」といふ「文節」を承けてゐる。然るに純粋の副詞は「赤い」といふやうな連体的の「文節」を承けることは出来ない。即ち被連体語にはなれない。だから「お盆ごと」は全然副詞になり切ってゐるといふことは出来ない。［…］これを「お盆」と「ごと」とに分けて二つの「語」とした方が便利である。［…］「お盆」といふ「語」は「赤い」といふ「文節」を承けることが出来るからかうしても差支は少しもない。［…］（杉山 1943、〔一三〕節。字体は現在通行のものに改めた。但し仮名遣いは原則として原文を残した。以下同じ）

このように議論し、「句の包摂」現象を解決している。つまり上の方は名詞

の性質として被連体の機能を持っていても、下の方は（形式的な）副詞として連用修飾の機能を持つということになる。それは「名詞」としての「詞」の性質と、「副助詞」[8]としての「助詞」の性質とが合して一つの「文節」を構成しているためである。

⒄　［その赤いお盆］ごと

名詞に助詞が下接して被連体の機能と連用修飾の機能とを持つことは、日本語文法において、実はごく普通の現象である。例えば「桜の花が咲く」というとき、「花が」という文節は、やはり「名詞」としての機能と連用修飾する機能とを併せ持っている。即ち「桜の～」に修飾される「名詞」としての機能と、「が」で述語を修飾する連用修飾の機能である。連用修飾の機能を持つということは、杉山によれば「副詞」と同じである。つまり「花が」は「名詞」機能と「副詞」機能とを併せ持っていることになる。この観点は、渡辺（1971）において「素材表示の職能」と「関係構成の職能」とが合して一つの「成分」を成すという理論と軌を一にするものである[9]。⒄に合わせて図示すれば以下のようになる。

⒅　［桜の花］が

以上のような観点で「寸前」を分析すれば、次のようになる。 a は動詞の「結婚」であり、 b は名詞の「絶滅」である。

⒆　a．［ハンター女王と結婚］寸前

　　b．［種レベルでの絶滅］寸前

このとき「寸前」は「助詞」のようなものとして理解される。つまり上接語「結婚」が「動詞」のとき、「寸前」が下接したからといって動詞を「名詞」に派生・転成させるわけではない。「動詞」は「動詞」のままである。この点については更に節を改めて後述する。

8）杉山の「副助詞」は、学校文法におけるものと相違があり、要するに連用修飾専門の助詞がみな「副助詞」なので、いわゆる格助詞も含むのであるが、この例の「ごと」はたまたま杉山でも「副助詞」である。

9）杉山の品詞論は、今では殆ど参照されていないが、今読むと味わい深いものがある。そのアイディアの一部は渡辺（1971）に受け継がれた（但し明示されていない）が、渡辺が敢えて引き継がなかった論点も少なくない。今後品詞論を展開する上で杉山（1943）はもっと参照される必要がある。

松下文法においては、「咲きました」でも一つの「動詞」となることはよく知られている。つまり「た」を独立した単語（「詞」ないし「念詞」[10]）とは見ない。しかしそれだけでなく、「花が咲きました」でも「動詞」であり、文（「断句」）全体になっても一つの「動詞」であるとされている。こうした松下の「動詞」概念において、形態的特徴は二の次である。「東京を出発遊ばす」の「出発」を「無活用の動詞」とする（松下 1977: 28）ように、活用の有無は品詞分類にとって重要でない。ここから更に敷衍すると、「崩壊寸前。」という形態であっても一つの「動詞」とするのではないかと演繹される。このとき「寸前」は単に「原辞」（接辞）であって、ここには「句の包摂」という問題は生じない。なお次のような例は挙げられているが、「崩壊寸前。」とは用法が異なる。

⑳　a．あんな兄弟の有る処へは嫁に来手が無からう。
　　此の学校へ這入りたてから秀才の名が有った。（2例、動作性名詞。64頁。傍線松下、以下同様）
　　b．病気が治り次第出勤する。（動作性副詞。65頁）

aは確かに「～が」「～から」という格助詞（松下の「格助辞」）が下接しているから、「名詞」になっている。bは語幹中止法（同「一般格」）であり、連用修飾機能を担っているから、確かに「副詞」として働いている。しかし「崩壊寸前。」のように文末で終止する用法ではない。サ変動詞語幹に「寸前」「後」などの語構成要素が下接して文末終止となった例は松下（1977）に見当たらず、松下の判断は推定するしかないが、これを「動詞」と見なすことが本稿の解決の道筋である。

それでもなお、「崩壊寸前だ」という形はどう見ても「名詞」の形をしていて「動詞」の形をしていないではないか、という反論が予想される。それに対して筆者の考えを次節に述べることとする。

10）『標準日本口語法』（松下 1977［1930］）では「詞」とされたが、『改撰標準日本文法』（1928、1930改訂）では「念詞」とされていた。

第４節　「動詞」と「名詞」の違い

日本語文法において、「動詞述語文・形容詞述語文・名詞述語文」という区別がしばしばなされている（例えば日本語記述文法研究会（編）2010など）。しかし各述語に「助動詞」が下接しても、これらの区別を変更するものではないだろう。また文型を考慮せずに機械的に区別するものでもないだろう。従って⑵⑴ｂは助動詞「そうだ」が下接して全体として形容動詞型の活用をする（降りそうな、降りそうに……）にも拘らず、依然として「動詞述語文」なのだろうし、⑵⑵は「頑張れ」という動詞形態素が用いられていても、実質的には「名詞述語文」であると判定されるだろう。

⑵⑴　ａ．雨が降る。

　　ｂ．雨が降りそうだ。

⑵⑵　私から贈る言葉は、「頑張れ。」だ。（以上３例、作例）

問題は格成分その他を取る「句の包摂」現象である。⑵⑶は、途中までは「ハンター女王と結婚する」という動詞述語文である。しかし最終的には名詞述語文のような形になっている。これは一体どちらなのだろうか[11]。

⑵⑶　ハンター女王と結婚寸前だ。（＝⑽ａを変形のうえ再掲）

ここで「名詞」とは何であるかということ自体が問題としてクローズアップされてくる。学校文法において、「自立語で活用がない」とされたことが、現在に至るまで後を引き、水谷（1957）のように活用の有無のみにて品詞分類をするのが正しいという説まで現れたくらいである。

しかし活用の有無は、品詞分類の決め手にはならない。例えば松下文法においては「無活用の動詞」が存在するくらいである。実際、中国語のような孤立語において語形変化の有無は品詞分類に何の役にも立たない。形態論的特徴は、辞書編纂上は大きな問題であるが、統語論においては二次的三次的な問題である。

11）影山（1993: 330）は、統語的な合成語は動詞的だが語彙的な合成語は名詞的だと指摘している。「寸前」はいかにも「統語的」だから、動詞的なものとして理解できそうそうだが、しかし影山のように一般化することはできない。「種レベルでの絶滅寸前の状態」「組合側と警官隊との衝突寸前の二十日深夜」などの例があり、これらは「～の」で修飾されているから名詞的である。

実際「お越しだ」「ご出張だ」のような体言型の敬語は、動詞のようで名詞のようでもある。形態論上は名詞型なので、動詞に下接するラレル、タイ、テイルなどの助動詞を下接することができない。しかし統語論上は「動詞」であるかのように働く。色々な格成分を取るからである。つまり体言型の形態であっても動詞のような語類が存在するわけである。その意味で、新屋（2014）が「名詞」の様々な統語的側面を明らかにしたことは評価されるにしても、それらがみな本当に「名詞」だったのかどうかは再考されなくてはならない。

「結婚寸前」「崩壊寸前」も、同様に形態論上は体言型であるが統語論上は動詞のように働くものとして位置づけることができないだろうか。勿論用例によっては明らかに名詞として働くものもあるが、動詞として働くこともあるということを認めるのである。ではこの考えでいくと「動詞」の活用体系はどのように描くことになるだろうか。

本稿は結論として、「動詞」の「活用の種類」の中に「イ活用」や「ナ活用」「ノ活用」といった類型を認めることを提案する。まず、「動詞」と「形容詞」を区別しない説は、松下（1930）や杉山（1943）をはじめ珍しくない程度には存在する。こうした学説では、名称はともかく、「五段活用」「上一段活用」などと並んで、「イ活用」といった「活用の種類」を設定しなければならない。次に「ナ活用動詞」はいわゆる「形容動詞」のことであり、「ノ活用動詞」というのは「第三形容詞」（村木 2012）や「ダ」（奥津 1993［1978］）の活用の種類のことである。形容詞（イ形容詞）を「イ活用動詞」として認めるのであれば、形容動詞（ナ形容詞）・「第三形容詞」もまた「ナ活用動詞」「ノ活用動詞」として「動詞」の中に入れるのが至当であろう[12)]。このように「動詞」の概念を再構築してみれば、「結婚寸前」「崩壊寸前」が「動詞」には見えないではないかと悩む必要はなくなるものと思われる。

12）「第三形容詞」を「形容詞」の一種に位置づけた文典として小島（2012）などが既に存在する。また日本語辞書として『民衆엣센스日韓辞典』（民衆書林、改訂第 2 版 1989）では早く「ダナ」「ダナノ」「トタル」「名ノナ」「副ノナ」といった表示を施しており、『集英社国語辞典』（第 2 版 2000、第 3 版 2012）では、一般の「名」と区別して「名ノ」「名ニノ」、一般の形容動詞「ナ」と区別して「ナノ」「トタル」「ナル」といった分類を施している。

第５節　結語に代えて

以上のように「結婚寸前」「崩壊寸前」を「動詞」の一種であるとした場合、以下のような研究の広がりが予想される。

第一に、「～寸前」は、「～中」「～っぽなし」などと同様、「アスペクト」形式の一種ないしその周辺的な語法として扱うことができる。従来「アスペクト」というと、「ている」「てある」「つつある」「はじめる」「おわる」「つづける」「てしまう」などの和語系かつ動詞活用型の形式のみが取り上げられる傾向にあった。しかし言語の実態はもっと大きな広がりがあるに違いない。この点は「モダリティ」の方が先を行っている。「モダリティ」ならば「そうだ」「ようだ」「べきだ」「らしい」「だろう」など動詞型活用以外の形式も取り上げられてきたし、漢語起源かと見受けられる「そう」「よう」のようなものも含まれている。周辺的なものとして「思う」「模様だ」なども取り上げられ、今後ますますこうした語彙は増えるだろう。「アスペクト」も同様に、豊饒な広がりが予想される。

第二に、サ変動詞語幹に接続するものだけでなく、連体形に接続する用法についても、今後の進展が期待される。連体形に接続しているから「名詞」と断じられやすかったが、「接続助詞」や「副助詞」「係助詞」としての側面も検討されなければならない。これらもまた連体形に接続するのであり（「行くから」「行くくらい」「行くしか」など）、そこに漢語系の形態素が進出する可能性はあるに違いない。実際「～以上」は接続助詞その他様々な用法を持つし（斎藤 2016）、「～以外」は「～しか」と似た用法を持つし（朴 2008）、「～自体」「～自身」は「だけ」などの副助詞と似た分布をする（トルヒナ 2015）。いずれも漢語という無活用形態素だからといって、単なる「名詞」にとどまらない側面がある。漢語系形態素の文法史は今後ますます目の離せないテーマとなるであろう。

本稿は科学研究費基盤研究(C)「体言系複合語アスペクト表現の文法史研究」（課題番号：26370544）の成果の一部である。成稿後、「寸前」について田中寛『複合辞からみた日本語文法の研究』（ひつじ書房）、ダ・デアルの扱いについて城田俊『日本語形態論』（ひつじ書

房)、田野村忠温「コピュラ再考」藤田保幸・山崎誠（編）『複合辞研究の現在』（和泉書院）のあることに気づいた。これらも参考にし、修正すべき点もあったが、他日を期したい。

参考文献

奥津敬一郎（1993）『「ボクハ　ウナギダ」の文法―ダとノ―』くろしお出版［新装版（1999）による。初版1978、第 2 回増補版1993］
影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
小島剛一（2012）『再構築した日本語文法』ひつじ書房
斎藤倫明（2004）『語彙論的語構成論』ひつじ書房
斎藤倫明（2016）『語構成の文法的側面についての研究』ひつじ書房
新屋映子（2014）『日本語の名詞志向性の研究』ひつじ書房
杉山栄一（1943）『国語法品詞論』三省堂
関一雄（1977）「体言的接尾語分類試案」『国語複合動詞の研究』笠間書院［初出 1971］
時枝誠記（1950）『日本文法：口語篇』岩波書店［改版 1978］
日本語記述文法研究会（編）（2010）『現代日本語文法 1 ：第 1 部総論／第 2 部形態論／総索引』くろしお出版
朴江訓（2008）「否定述語と呼応する「しか」「以外」「ほか」をめぐって」『日本語と日本文学』46
服部四郎（1960）「附属語と附属形式」『言語学の方法』岩波書店［初出 1950］
林四郎（1987）『漢字・語彙・文章の研究へ』明治書院［「臨時一語の構造」、初出 1982］
松下大三郎（1977）『標準日本口語法』勉誠社［徳田政信（増補校訂）。初刊 1930］
水谷静夫（1957）「日本語の品詞分類」岩淵悦太郎（編）『講座現代国語学 II ことばの体系』筑摩書房
宮岡伯人（2015）『「語」とはなにか・再考：日本語文法と「文字の陥おとしあな穽」』三省堂
村木新次郎（2012）『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
森岡健二（1994）『日本文法体系論』明治書院
渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房